

杖と剣の物語

フラクシンズの逃亡戦

館主ひろぷらう



杖と剣の物語

フラクシズスの逃亡戦

館主ひろぶらう

序章

序

この世界では、人は誰でも1つの魔法を持つ。

動物は「バリア」の魔法を持つ。

人間のみ幼少期には皆「バリア」の魔法を持つが、大人に近づくとつれ「バリア」は薄れ、血筋や生い立ち、環境、思想、思考様々な要因により違う魔法を持つようになる。

しかも「バリア」の魔法以外は原則、無機物に対してしか発動しない。

特定の物に触れて、初めて魔法が発動できるのである。

なので、呪文を詠唱して何もない空間から火の鳥が出てきたり、杖の先からレーザーが出たり、空から無数の隕石が落ちることもない。何もないところから、何かを生み出すのは不可能である。

存在するものに魔法の力を足す、それがこの世界の魔法である。「バリア」の魔法以外は、ある者は、魔法で作物を育て、ある者は、魔法でモノを加工し、ある者は、モノに魔法を込めて商売をし、ある者は、モノに魔法を込めて職業適性を高める。

個人差はあるが平均して20歳前後で個人の魔法は確定する。大人の魔法、これを「特技魔法」または「職業魔法」という。

しかも大人の5割から6割が、魔法石を動かす魔法になるという。魔法石。少し山へ分け入って、地面をほればザクザク出てくるあの脆くて黒い石である。これを硬くなるよう加工して、道具にはめ込む形にするのも、そういう職人の「職業魔法」である。

これはそんな世界に住む、二人の少女の話。



杖と剣の物語

フラクシンズの逃亡戦

館主ひろぷう

第1話

その日、奇妙な新生が入って来た。

商家が多く、商業で富み栄えているイェンセン城国、その中で
富裕層のお嬢様を集めたアイマリース女学院。

14～16歳の子で構成された「5」のクラスは騒然とした。

担任である女性の後から、その生徒が開き戸を手で確認しながら入ってきた。

設立5年目にして初めてだったのである、白杖をついた生徒は。

白杖をついている人を初めて見たお嬢様も数人いたようである。

そして目を引くのはそこだけではない。目隠しで顔が半分隠れている。

好奇の目、半信半疑の目で見つめられる中、

目隠しの生徒は杖を振りながら教卓の横へ進んでいく。

教卓に杖が当たると担任が彼女の肩に手を置いた。止まれ、という事だろう。

新生は黒板の方を一度向きかけて間違いに気づき、

新調したての白いセーラーの襟と、深緑の制服の長いスカートを揺らして皆の方に向いた。



白いワイシャツとベージュのロングスカートの担任が、暗い顔をしてヒモのついた試験管バサミを取り出す。

3つの試験管バサミには、魔法石。

3本のチョークをそれぞれにセットして、ヒモを手に巻き黒板の3箇所セットした。

1つは、日付と日直の名前を書き、

1つは今日の予定や連絡事項を書き

1つは新入生の名前を書いた。

まるでヒモでチョークを操っているように見えるが、彼女が実際にヒモを通して操ってるのは3つの魔法石である。

彼女の魔法は、筆記具を3つの魔法石で同時に動かせる魔法のようだ。

板書しながら、彼女は黒板を見ずに生徒達の方を向いて話始める。

抑揚のない、無感情な声が教室に響く。

「えー、おはようございます 皆さん。突然ですが今日からクラスの仲間が一人増えます。

彼女の名前は サユ=ガーネットさんです。皆さんご覧のように目が見えていません。

そして。」

一目見ただけでも普通の人とは違う、その彼女に他に何かあるのか。

18人の女生徒はおしゃべりを止めて、次の言葉を待った。

「声が出なくて話す事もできません。」

クラスルーム内のざわめきが大きくなる。

好奇心にかられた後ろの席の生徒は、木の椅子を引いて立ち上がって目隠しの女生徒を注視する。

2, 3人の生徒などは木の机に片足あげていた。

教卓に近い席にいるピンクの髪の巻き髪の生徒は、ことさら好奇心に目を輝かせ、

新しいおもちゃを見つけた子供のようにニヤニヤと笑っていた。

「皆さん協力して、仲良くしてあげてください。」

と担任。無茶な事をさらっと言う。

コミュニケーションが取りづらいのは必至だった。

終始口を硬く結び、無表情なサユと呼ばれた新入生。

その彼女が右側頭部の短い三つ編みとボブの黒髪をゆらしてゴソゴソと、

どこからかスケッチブックを出す。

ページをめくり、ずいっとスケッチブックを前に出す。

“よろしく願います” と書かれたページが開かれていた。

午前の授業の終わりを告げる鐘が鳴る。

今日は「5」のクラスでまともに授業を聞いていた者はほとんどいなかっただろう。

皆、教室の一番後ろの窓側に座った新入生が気になっていた。

しかし自由時間になってもサユに近づく生徒はいない。

みな遠巻きにヒソヒソと話し合い、話しかけるきっかけをつかみあぐねていた。

目隠しが顔の半分を覆っている姿が不気味な上、

見えなくて話が出来ない人にどう声をかければいいのかわからない、というより

声をかけて良いものかすらわからない。

クラス全体がそんな雰囲気だったのである。

当のサユは背筋を伸ばし、終始キレイな姿勢で席についている。無表情で。

どこかクラスメイト達の動揺をどこ吹く風、と受け流しているようにも見える。

「さっ サユさん！」

裏返った大きな声が部屋に響き渡る。サユは声がした方向あたりに顔を向ける。

全体がピンク色で、重力に逆らうようにハネ上がった前髪、

ツノのように編みこまれたダブルのシニヨン、さらにそこから小さな縦ロールが垂れ下がる。

短い眉の下には勝気な瞳、さらにこのクラスの年齢では、かなり珍しいと思われる大きな胸が特徴的な女生徒がサユに近づく。

「ばっバーキン様、いっ行かれるのですか!？」

「さすがバーキン様！」

サユに声をかけた生徒の後ろに、中小2人の生徒が遠慮がちに続く。

「今何か困っている事はありまして？遠慮なさらずにおっしゃって下さって!!」

わからない事があつたら何でも聞いてくださいな!!! そうですね学院の中を今のうちに案内してさしあげますわ!!!!」

ピンクの派手髪 of 生徒が大きな声で一氣にまくしたてた。

「あの...耳が悪いとは先生はおっしゃっておりませんでしたわ...」

後ろに控えてた2人の生徒の小さい方が注意する。

サユは無表情に、大げさに耳に指で栓をするジェスチャーをした。

実際栓をしたいぐらいうるさかったのも事実。

「私は元から声が大きいのですの！」

普通のトーンに声を落として話すピンクの髪 of 生徒は少し顔を赤らめ、不機嫌そうな顔をした。

サユのスケッチブックがせわしなく開かれる。

“ありがとう”

“トイレはどこですか?”

“質問があります”

立て続けにページが開かれメッセージを見せる。

サユはどのページに何が書かれているか全部覚えているようだ。

この時、遠巻きにしていた生徒達の顔から不安の色が和らぐ。

どうやらスケッチブックで最低限のコミュニケーションが取れるようだとなったからだ。

「わかりましたわ、トイレもすぐに連れて差し上げますわ、

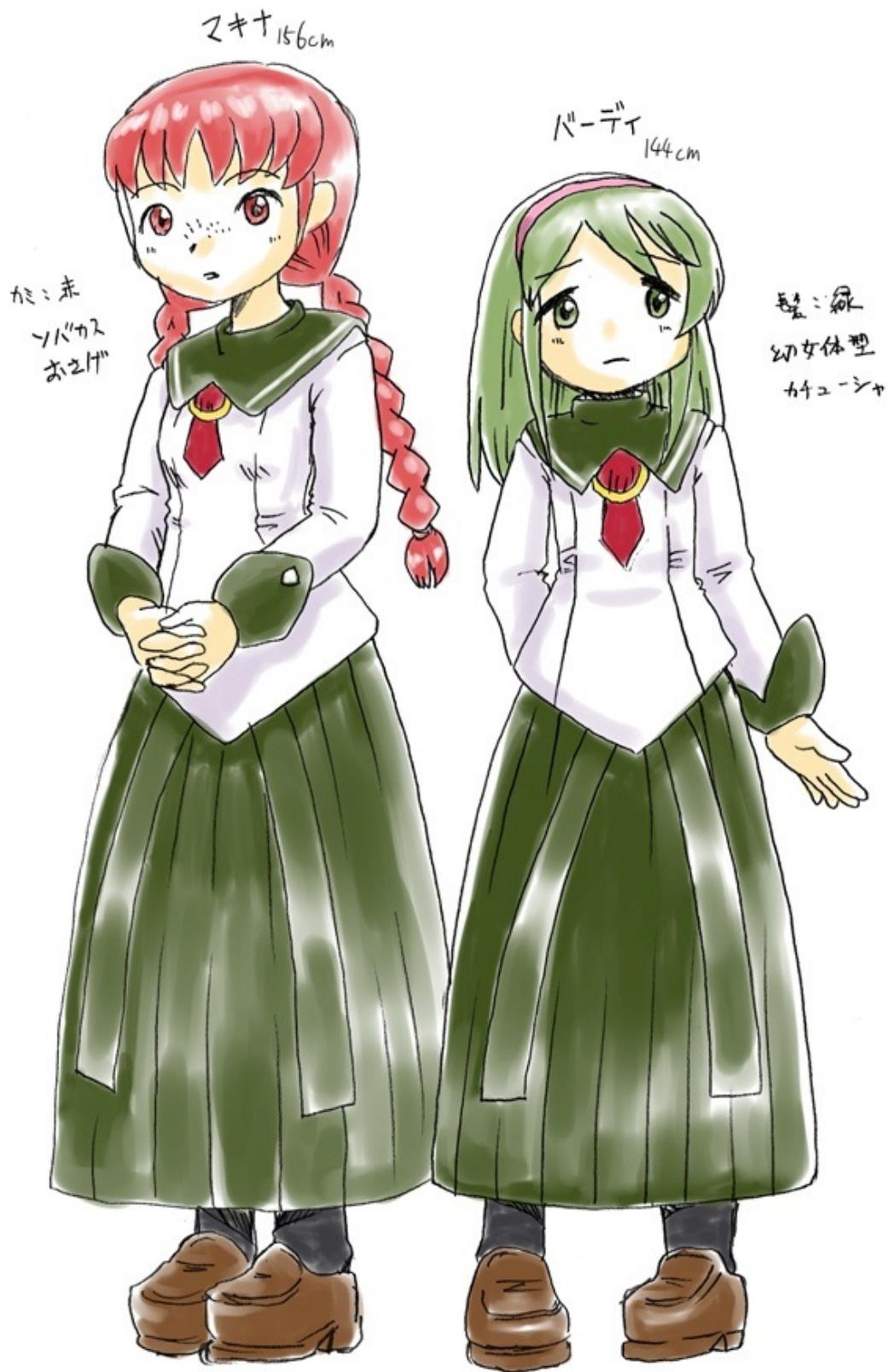
それから案内をしてさしあげましょう。

その前に自己紹介が遅れました、私は...」

ピンク髪 of 少女が話す間、サユがスケッチブックをめくる。

“ルコリー=バーキンさんはどこにいますか?”

「ルコリー...バーキン...えっ!？」



「ふう...」
トイレ前で息をつくルコリー。
目の見えない人に、日々当たり前にしていることを説明するのは少し苦労した。
「ご不浄」なので手で触らせて位置や方向を確認させていいものかも悩んだ。
「大丈夫でしょうか、あ、あの方...」
バーディがトイレの方をうかがう。
「バーキン様、疑問に思ったのですが...」
「ん？なにマキナさん。」

「あの眼隠して何か意味があるのでしょうか。
目の見えない方って皆目隠しをしているのでしょうか。」
そこへ、

“お待たせしました”

のページを開いてサユが出てきた。

「大丈夫でしたの？」

の質問に対して、“はい”のページが開かれた。

次に新たなページが開かれる。

“目隠しは、目の見えない人の新たなファッションです。”

「まあ、やはりそうなんですの！」

「よく見ると、小さな刺繍もあってかわいいですものね！」

大嘘である。

サユは事情があって目隠しをしているが、それを話して回るつもりはない。

しかしさすがお嬢様達である。簡単に信じ込んでしまった。

なにせ、比較対象を知らないのだからしょうがない。

きっと、真実を知るのはこの学院から社会に出て数年後ぐらいになるだろう。

「さて、では案内して差し上げますわ。それとも、食事が先かしら。

時間に余裕がまだありますからどちらでもかまいませんわよ」

サユはスケッチブックをめくる。

“すみません 2人きりにしてもらえませんか？”

これはルコリーではない、明らかにバーディとマキナのいる方向へ向けて開かれた。

「そ、そんな…」

「バーキン様、どういたしましょう？」

お下げを揺らして動揺するマキナは半泣きだ。

人見知りで背の低いバーディはマキナの後ろに少し隠れながらルコリーにお伺いをたてる。

「マキナ、バーディ 私なら大丈夫ですわ。お2人は先に食堂でお昼をお食べになって。

サユさんも私を探してらしたようですし、私もサユさんに色々とお話を聞きたいですもの。」

すごすごと去る二人を見送る。

廊下では何人かの生徒とすれ違う。

「ごきげんよう、バーキン様」

「ごきげんよう」

応えるルコリー。時々通り過ぎる下級生たちがそう声をかけていく。

声をかけた後、その横に立つサユの姿に驚き、足早にその場を離れていく。

“みなさん 礼儀正しいですね”

そう書かれたサユのスケッチブックのページが開かれる。

「そうでしょう、そうでしょう！」

何故かルコリーは得意げだ。

「フッフ、私が入学した時はこの学校はひどいものでしたわ。

貴女、貴族育ちのわがまま娘ばかりが集められた場所がどうなるか想像できますかしら？」

“いいえ”とサユのスケッチブック。

「大声でおしゃべりしながら好き勝手走り回って。おサルさんの集団でしたわ。

生徒の親達の寄付で成り立つこの学院で、先生方は注意する権限も
勇気ありませんでしたし。」

ルコリーは笑顔を絶やすことなく話を進める。

気さくな性格なのかしゃべる、しゃべる。

軽くステップを踏んだり。

話が長くなるのでルコリーの話のを要約すると、彼女は学校中のクラスを回り、

「良家の娘なら、淑女たれ」と説いて回った。最初は抵抗や妨害があったが

日々穏便に過ごしたい穏健派が徐々にルコリーに賛同し、今のような穏やかな学園が形成されていった。

結局、悪ふざけをする生徒は少数、周りに流されやすい人が多数いて、

「淑女たれ」と説いたらそちらに流される人が多数になり、悪ふざけ組は鳴りを潜めたのである。

長く続く話の中、サユは杖の上部を軽く掴み振りながら歩く。

杖がカラカラと木の廊下の床をすべる。

話に夢中のルコリー、杖でまわりを確かめながら歩くサユ、先ほどから案内が全然進んでない。

“それはすごいですね”のページが開かれる。サユ無表情。

本当にそう思っているのか全くわからないが、ルコリーは得意顔。

「そうでしょ、私ってすごいですよ！フフフ。まあバーキン家の長女とサルでは格が違いますからね。

新生生の案内の役目も、学校の代表とも言える私の役目と意思しましたの。

そうだわ、ところで貴女出身はどちらですの？私は…」

まだ話が続きそうだ。

サユはスケッチブックのページを開きかけたが、思い直したようにそれをしまった。

サユが手を伸ばし、ルコリーの体の位置を確かめるように肩に触れた後、腕をつかんだ。

『まどろっこしいです。話があります。』

「!？」

ルコリーは周りを見回す。すぐ近くに声が聞こえたが、サユ以外は少し離れた場所を歩く生徒しかいない。

サユの口は先ほどから硬く閉ざされたままだ。

それに声が耳から聞こえた、というより体の中に声が響いたようにも思える。

サユが掴んでいた腕を軽く引っ張る。

『私です。私が魔法であなたに話しかけています。急ぎの用が貴女にあるのです。』

この世界では、人は誰でも1つの魔法を持つ。

幼少期には皆「バリア」の魔法を持つが、大人に近づくにつれ「バリア」は薄れ、

血筋や生い立ち、環境、思想、思考様々な要因により違う魔法を持つようになる。

しかも「バリア」の魔法以外は原則、無機物に対してしか発動しない。

特定の物に触れて、初めて魔法が発動できるのである。

個人差はあるが平均して20歳前後で個人の魔法は確定する。

大人の魔法、これを「特技魔法」または「職業魔法」という。

しかも大人の5割から6割が、魔法石を動かす魔法になるという。

15～6歳で特技魔法を持っている者は少ない。

「バリア」の魔法も弱くなり、思春期のこの時期が一番魔法が使えない時期である。大人の魔法の為の準備期間といったところか。

「ええ～～～っっ！！」

ルコリーは声大きい。

普通とは違うサユの姿が珍しいのか、廊下を歩いている者は2人に注目しているが、ルコリーの突然の絶叫に多くの者が不安を感じ、ザワつきはじめた。

『うるさいっ このバカ！静かにしろ！とにかく他人の邪魔がなくて、広めの場所へ案内しろ、ください。』

「ええっ！？あっええ、ええ！？」

動揺したルコリーはサユの話し方が少しブレた事に気がついていない。

サユは杖を体に寄せて柄のやや中ほど持ち、左手でルコリーの右の二の腕を軽くつかんでゆする。この体勢で案内しろと催促しているようだ。

中庭に出てきた2人。

アイマリース女学院の案内と言っても、元々は商家の木造の家を改築したもので8つの教室と食堂、運動場と室内運動場とこの中庭ぐらいしかない。

あと、少し離れたところに寮があるが今は案内する必要はない。

運動場は広いが、正門から校舎へ続く馬車道の隣にあり、人目に付きやすいし休み時間とあって、利用している生徒も多い。

校舎と室内運動場、その2つを繋ぐ廊下に囲まれたこの中庭なら、時折人が通るぐらいでまだ人目に付きにくい。

低い樹木も植えられていて、さらに都合が良い。

『ねえ、さっきから手に何か柔らかいものがあたるのだけど、これ何かしら。』

サユが魔法で話しかける。

「何って...胸にきまつてるじゃない...」

『え！？貴女私と同じ年齢ですよ。それが師匠と同じぐらい、いやそれ以上の...』

ルコリーは、右胸をなでられた。

「ばっばかあぁっ！」

羞恥と怒りの声を上げ、サユの左手をつかみ上げる。

「女子同士でもやっても良い事と悪い事の区別も！」

あぁもう貴女、色々おかしいですわよ！」

揺れる胸を腕でガードするように押さえつける。

「話せるなら、話せるって言いなさいよ。みんなを騙して楽しいのかしら？」

さらに怒りを増した声でルコリー。

サユは、左手を取られていたがすました顔で、

『特技魔法は他人に教えないのが鉄則、って親に教えてもらってないのですか？

それに魔法は物と接触して使うものでしょ。全員と話すすなんて物凄く疲れるのよ。』などと言う。

私は物扱いか、謝罪はないのかと思うルコリー。ますます不愉快になる。

無機物に触れて魔法を発動させるこの世界で、

サユのようなマインドに働きかける魔法はイレギュラーでレアな存在である。
イレギュラーとはいえ、直接触れないと会話が出来ないようだ。

『とにかく私の話を聞いて。急を要するのです。』

強く掴まれていた左手をすりと抜いて、逆にルコリーの手を握る。

サユがぐっと顔を近づける。

ほのかに石鹸の香りがする。朝に湯浴みでもする習慣があるのだろうか。

「な、なによ!？」

家では専属メイドに育てられ、学院では「バーキン様」と敬われているルコリーに
こんな接近して話をしようとする者はいない。無礼である、と言いたいところ。

よく考えてみれば、手から体に話かけているので顔を近づける必要もないし、
相手は目隠しをしているのでどこに焦点をあてて見ればいいのかわからない。
逆に目隠しに圧倒されそうだ。

とりあえず、口を見る。硬く結ばれているが小さくて可愛い口ねえ、などと考えている。
先程までのイライラは、どこかに引っ込んだようだ。

『あなたのお父様が亡くなりました。』

「え!？」

『自殺か他殺かハッキリしませんが、他殺の可能性が高いです。』

『お父様につき従ってられたあなたのお兄様、ヒースフレア=バーキンさんも行方不明です。』

「ええええええ! おおおお兄様が、お兄様までっ!!」

父親より、兄の行方のほうが反応が大きいルコリー。

意外に思うものの、血縁者や親類のいないサユにはそれが普通かどうかわからない。

兄のように慕っていた人がいた事があるので、そんなものかなとも思う。

『バーキン家は本家があるのはご存知ですか？

お父様の生前の遺書により、お兄様とあなたが財産を2分する事が決まっていますが、
その2人が実家にいない状態なので、本家が財産の凍結を行いました。』

『30日後にあなたの実家で相続会議が開かれます。

その時までにはあなたは実家に戻らなければいけません。』

そこまで一気に話したサユが顔を離す。

『私は貴女の実家のあるタウチット城国までのボディガードとして雇われました。

一刻も早くこのイエンセン城国を発ち、タウチットへ向かう事をお勧めします。』

大陸の中央、フラクシズ地域の北にタウチット、中央西の海の側にイエンセンがある。
馬車で8日はかかる距離だ。

2人の間に暫く静寂が流れた。

聞こえるのは校舎や運動場の女生徒達の声や扉の開け閉めする音。

暖かくやさしい風が2人の間を通り過ぎる。

この時ルコリーはどんな顔をしていただろうか。

サユは見えないし、ルコリー自身どんな表情をしていたかわからない。

それどころではなかった。

ルコリーの頭の中は色々な言葉や事柄が駆け回り、それらを吟味し整理するのに一生懸命だった。

無理もない。

今まで何不自由なく暮らしていた少女には、いきなり理解しろというには難しすぎる事柄が多すぎた。

歩いていると、いきなり地面が消えて地底の暗い闇へ落ちていく気分。

そんな気持ちの中、ルコリーの出した答えは...

サユにはほんの一瞬、

ルコリーには太陽が15度ほど傾いたぐらいに感じた時間が過ぎた時、ルコリーは口を開いた。

「貴女は北から来た人でしょう？」

『ええ、そうよ』

ずっとルコリーの二の腕を掴んだままのサユは魔法で答える。

第三者から見ると、ルコリーが一人しゃべりをしているように見える。

幸いに先ほどから中庭は2人しかいない。

「イエンセンのある南ではね、バーキン家は知られてないけど北では富豪として有名なのよ。

貴女は嘘で私を連れ出して、人質にしてお父様に身代金をゆする気ね！！」

『.....』

「もし家で何かあった場合には、馬車を寄こすか信頼ある使いの者が来るはずよ。

ふっお馬鹿な人ね。私は貴女のくだらない嘘には乗らないわ。

そして貴女を警備員に渡して万事解決になるわね。

しかしなかなか考えたわね。私と近い年齢の女の子を使って学校にもぐりこむなんて。

よく学校関係者を騙せたわね。ここに入るには紹介状を初め、色々な書類が必要なのに！

あなた達一味はとんでもない悪党みたいね！

大方、お金に困って悪党の手伝いをしているのでしょうか？

今、本当の事を話すなら、私が学校に掛け合っ保護なりなんなり.....」

『.....私は今、学校関係者のはからいで、警備員寮に寝泊りしています。』

「.....は？」

ここ、アイマリース女学院は赤いレンガの高い塀で囲われ、正門と裏門に警備員詰め所がある。

その堀の外に寄り添うように細長い警備員寮がある。

富豪のご令嬢を集めている場所なので、セキュリティ面では力を入れているので安全ですよ、

と内外に示しているのである。

ちなみに警備員は軍役経験者が絶対条件だが、家柄や素性の明らかな者が優先で雇用される。

女子を多く預かるので、男性警備員の抑止力として女性警備員も多い。

警備能力としてはいま一つ不安なのだが、その悩みは学院内の大人の間だけで秘されている。

『いい？ルコリー。私は依頼主と会ってないけれど、お父様が亡くなる10日以上前に

有事の時に貴女を守る依頼が来ていたの。

つまり依頼主は近いうちに有事が起こる事を予見し、

貴女への遺産を横取りしようとする敵が現れる事まで考えていたのです。

そして、家紋入りの馬車ですっ飛ばして、敵の標的になる事も危惧していたのです。』

今度は私の番だ、とばかりにサユが話を続ける。

『貴女のお父様は殺された可能性が高いのです。

そして貴女とお兄様の前にその敵が現れる可能性も高いのです。もしかしたらお兄様は...

私は二日前にこのイエンセン城国に入って、わたし達のネットワークで誰よりも早くお父様の訃報を聞きました。だから一刻も早くこのイエンセンを出る事が敵を出し抜くチャンスなのです！』

魔法でいっぱい喋るのはつかれるわ、と呟きながらサユの話は終わる。

サユの話の後、少し考えてからルコリーが言う。

「...学校公認だからって、貴女がその敵である可能性だってあるじゃない。」

『...は？』

ルコリーの腕を掴んでいたサユの手の力が少し抜ける。

ぺちっ

ルコリーは左手でチョップを繰り出したが、サユの左手で止められる。

「ほら、貴女の目が見えないのも嘘なんですよ！白杖もその目隠しも私を油断させるための...」

『師匠の元で修行した成果です。師匠はすごいんです。すごい師匠なんです。

私は目が見えないし、喋れないのも事実です。

話せないからこんな魔法が使えるように...』

サユが言い返していた途中で、ルコリーはサユの右手を振り払った。

「とにかく！！

何かあったとしても私は家の指示を待ちますわ。

お父様の指示でこの学校に来たのですもの、勝手にここを離れられませんわ！

お父様とお兄様に手紙を書いて指示が来るのを待ちます！」

言い放つと、ルコリーは足早に中庭から校舎へ入っていった。

鐘が鳴る。

どうやら午後の授業が始まる鐘のようだ。

ぐう～、とサユのお腹が鳴る。

私のお昼ごはんが...と心の中で呟いてうなだれた。



杖と剣の物語

フラクシズスの逃亡戦

館主ひろぷう

第2話

ルコリーが生きてた時代よりずっとずっと後世の歴史学者が言う
「魔法のせいで産業革命が2千年遅れた」と。

魔法の便利さを表すものとして、次のようなことわざがある。
「大人が10人集まれば国が作れる」

いずれも大げさな表現ではあるが、人が長い歴史の中で
いかに魔法に頼っていたかがわかる言葉だ。
壁を頑強にする魔法を持つてゐる左官職人が一人いれば、建築様式は大きく変わる。
村や町の発展度も大きく変わる。
土や岩を動かす魔法を持つ者がいれば、開墾や掘削が容易になる。

だが個人が強い力を持っていると、まとめる側からすればやっかいなようだ。
それぞれが自分を生かす場所を探し求めている世界では、
大きな城塞都市・「城国」が最大の集団体系と思われる。
城国が集まって「国」となる例は稀である。

ここイエンセン城国も元は「土を富ます」魔法や、
魔法石で多くの地を耕す魔法を持った者が集まった農業の町だった。
しかし10年前の大きな戦争で、戦火から逃れるため多くの商家がやってきて城を作った。
東に山々が並び、西に延びるこの小さな半島の地なら、戦争の火の粉がかかりにくかったのだろう。
元々住んでいた農家は、城国の回りに幾つかのコミュニティーを作り、
作物を商家と売買い富み栄えている。



ルコリーは曇りガラスの戸を開けた。

このガラスも脆くて溶解温度の低い、透明度のある「ガラス鉱石」なるものを、職人が魔法で硬度を上げて板ガラスにしたものである。不純物が多いため透明なガラスは作れないが、採光はちゃんと出来ている。

「はあ～～」

鬼のツノのように盛りあげた左右二つのシニヨン、残りを小さな縦ロールにしたクセのあるピンクの髪と、勝気な瞳を持った少女が溜め息をついて、窓枠にひじを突く。教室からはイェンセンの色んな形をした家々が眺められる。天気が良くて、眺めが良好だ。ルコリーの実家もこの学校のように丘の上に建てられているので、この景色を見ると故郷を思い出す。城国の富の象徴、「ガラスの城」が視界の端にあって目障りだが。

サユと中庭で話をしてちょうど一日経った昼休み。

「ど、どうなされましたかバーキン様」

「サユさんと何かあったのですか？」

バーディとマキナが心配して声をかけてくる。

「ああ、何でもありませんわ。2人とも先に寮へ帰って頂いてよろしくてよ」

ルコリーは硬い笑顔で対応する。

何かまだ言い足りなさそうにしながらも教室を去る2人を笑顔のまま見送る。

ルコリーは子分を作ったわけでも、そのつもりもない。

気が付いたらいつの間にか2人が後ろについて回っていた。

ルコリーが来る前、2人はよくいじめられていたと聞く。

そんな事より、考える。

お父様が亡くなったという事を。

お爺様の代で分家となったバーキン家を、本家をしのぐ富豪にのし上げたのはお父様だ。

どんな手を使ったのかは知らないルコリーだが。

遺産目当てで殺害したとなると、本家の人間か、お父様の弟の叔父様か。

だが本家は財産の凍結を行い、相続会議を開くという実に紳士的な動きを見せた。

本家とはいえ財産の凍結は越権行為にも思えるが、バーキン家の血筋の者が家にいない以上、トラブルを避ける最善の策であるように思う。

となれば、一番あやしいのは叔父様ということになる。

叔父様...遠い昔に一度会った事があるが、スマートで厳しいだけのお父様と違い、

小太りで優しくそうでとても人を、ましてや実の兄を殺害するような方には見えなかった。

厳しいお父様。

家にいても私に近づこうともしなかったお父様。

ルコリーとは歳が離れていたお兄様をいつも連れて歩いて、お兄様を厳しく叱り付けるお父様。

サユからお父様の死を聞いた時は驚いたが、それほど衝撃は受けなかった。

だが、お兄様が。

あの優しいお兄様が。

庭で一人で遊んでいると、忙しい時間の合間に一緒に遊んで下さったお兄様。

ご近所を歩けばご婦人方が、家にいればメイド達がいつも噂話になるほどのイケメンなお兄様。

頭が良くて15歳の時から、お父様に教わりながら仕事を補佐してきたお兄様。

3年前に執事からアイマリース女学院に行くように言われ、数えれば4年も会ってないお兄様が。行方不明？まさかお父様と一緒にの事に？

お父様や遺産の事はルコリーにとってはあまり関心がなかった。ただ、お兄様が無事だという知らせが、使者が来てほしかった。いや、無事なら使者も何も来ないはずである。馬車の音がする度に、複雑な思いでルコリーは正門を見る。

「ひっ」

突然、肩に手をかけられ飛び上がるルコリー。

全く人が来た気配が無かったのに。

『そこは私の席のはずですが』

右側に小さな三つ編みのある黒髪のボブ、目隠しと白杖を持った少女がルコリーの肩に手を置いている。肩に置いた手を通して、サユが魔法で話しかけてきた。

「いーじゃない。どうせ朝からいなかったんだし。それより中庭で何してるのよ。」

ルコリーは、今日初めてサユと顔を合わせる。

目隠しが昨日と違うのだろう。今日は端に植物のツルが伸びている刺繍が施されている。

『戦う事になった時の整地と採寸。』

「戦う、って本当に貴女が戦うつもりなの？あと、中庭ウロウロして皆のいい笑いものになってるんだけど。」意地悪に笑って返すルコリー。

朝からサユは中庭を歩き回り、花壇を杖でつついてはさらにその回りも歩き回る、という動作を繰り返していた。

その様子をほとんどの生徒が中庭に面した窓から見ていた。

『師匠の元で修行したから戦いには自信があります。それよりも。』

早く貴女がここを発つ決心をしてくれたら戦う必要がなくなるのですが。』

と、ルコリーの嘲笑を気にしていない様子でサユが返す。

「寝言だわ、たわ言だわ！貴女の事なんて何一つ信じない！それより...」

ルコリーは言葉を切って立ち上がってサユを睨みつける。

「今日から授業が午前中だけになったわ。これも貴女と関係があるの？」

『なるべく他の生徒を巻き込みたくないから。貴女も早く寮にお帰りなさい。』

それよりも話し方が昨日と違うのですね。少し周りに気を配られた方がいいですよ。』

サユに指摘されてルコリーは気づく。

教室にはまだ数人の生徒が残っていた。

サユが口を動かさず魔法で話しているのに対して、ルコリーは口で話して対応している。これを回りの者からどう見えるだろうか。

話せないサユに向かって、あざ笑ったり強い口調で話したりとまるでいじめっ子である。

「バーキン様が...？」「バーキン様どうなされたのかしら？」

クラスメイト達が距離を置いてヒソヒソ話していた。

「！！！！.....じゃ、そういうわけだから！ごきげんようサユさん！」

立ち去ろうとすると、サユがルコリーの腕をつかむ。

『何かあれば中庭に来てください。』

それだけ伝えると手を離す。

ルコリーは自分の席に戻って、カバンを引っつかみ早足でクラスを出る。

「サユさんどうされたの?」「何かありましたの?」
残っているクラスメイト達に囲まれるサユ。
スケッチブックをどこからともなく出してページを開く。
“学校の決まり事を教えてもらっていました”
クラスから出る間際、その様子を一瞬振り返るルコリー。
一体どれだけの事態に備えているスケッチブックだろうか。
一度中を全て見せてほしいと思う。

ルコリーは、校舎に似た木造の建物の寮に帰る。
一人で部屋にいと、お兄様の心配ばかりしてしまう。
いつも後ろにいる2人は、寮では部屋に閉じこもって顔も見せない。
「.....」
闇に少しずつ侵食されつつある、夕日に染まっていた窓に目を向ける。
サユはまだ中庭にいるのだろうか。
ふと新入生の事を考える。
ブンブンと頭を振るルコリー。
だめだ、全部あの嘘つきの女のせいで私はこんなに苦しんでるのに。
あんな嘘つきは信じない!
ルコリーはベッドの賭けフトンの中に顔を突っ込んでうずくまった。

28/30

朝もやの中、サユは素振りをやめた。
ルコリーの足音が近づいてるのがわかったからだ。
「...おはよ。」
ルコリーは不機嫌そうだ。
サユは彼女に近づこうとしてやめた。ルコリーの方からこちらに近づいて来た。
「まさか一晩中ここにいたの?」
ルコリーに触れようと手を出す。もう触れられる近さまで来てるのはわかる。
所在を探すその手に、ぐいっとルコリーの二の腕と体押し付けてきた。
『おはようございます。ちゃんと警備員さんのところで寝ましたよ。
貴女こそ早起きですね。もしかしてココを発つ決心がつけました?』
手を通して、魔法で話しかけるサユ。
ムズがゆそうに首筋を搔くルコリー。
「貴女のくだらない嘘のせいで、あまり眠れなかったわよ。
ホントにサイテーよね、貴女って。」
不機嫌に呟くルコリー。
『全部事実で、嘘は申しておりません。サイテーでもありません。
なんか話し方に品が無くなりましたね。もしかして元々の話し方に戻ってるのかしら?
ダメでしょ、貴女は皆さんの模範となってるのでしょうか。』
「嘘つき女と丁寧に話すほど器量は広くないのよ」
ルコリーが睨む。サユは特に動じないし見えていない。
『この商家には子沢山の家が多いのね。』

仕事に忙しくてなかなか4女や5女に目をかけてやれない。

そこに目を付けたのがこの学校の創設者。お嬢様方に花嫁修業をさせましょう、って。

長男長女を大事にする家が多いですから、それ以外は手に余るのでしょうね。

多くの寄付金と、少女達がここに集まりました。』

「くっ詳しいのね、私はそれを知るのに一年かかったのに。」

ルコリーの声に驚きと警戒が混じっている。

あと、本気で悔しがってる。

そんな事で張り合っとうする、と考えるサユ。

『ん、創設者と知り合いなので。その人は北の商家で、南への進出の足がかりに

南の商家に媚を売るために、この学校というものを設立したの。

長女で入ったのは貴女だけ。

親にちゃんと目をかけられて育った人が少ないから、素行が悪いコも多いわよね。』

ルコリーが黙っている。サユの話の行方を見守っているようだ。

『貴女すごいじゃない。昨日クラスメイト達と話してわかったわ。

皆、貴女の話し方や振る舞いを真似しているのね。

入学早々起こした「淑女たれ」って運動で皆貴女を模範としているのよ。

誰もが人を惹きつける魅力と気品に溢れた貴女にあやかりたい、と思っているわ。

だから、話し方や態度は私にもちゃんとしないとね。』

「.....」

短い沈黙の後、ルコリーがサユの手を引っ張って歩く。

『ちょ、痛い』

「そうよ、私は模範なのよ。だから授業を受けない悪い子には

ちゃんと受けてもらいますわ！フフフツ」

どうやら機嫌が直ったようだ。

怒りっぽいが冷めるのも早い。

おだてると機嫌が良くなる。

案外扱いやすい子なのかもとサユは考える。

ではどうおだてると、この地から出てくれるかしら。

昼の鐘が鳴ってしばらく経つ。

ルコリーはまた溜め息をつきながら、教室から正門を見ていた。

朝から曇り空で、雲のグレーが自分の心と重なる。

今日も授業は午前で終わりになったので、寮に入っていない生徒の家の馬車が出て行く。

残りの生徒もほとんど寮に帰って、校舎に残る生徒も少なくなった。

もう少ししたら先生方が見回りをして生徒を校舎から追い出すだろう。

「ねえ、塀の上を人が歩いてない？」

好奇心と恐怖が混じった声をあげたクラスメイトがいた。

彼女が目を向けてる方向を見る。

遠くてわかりにくいのが、高い塀に3つの点が上から下に向かって動いてる。

最初はそれが何か理解できなかった。

だが徐々に理解して鳥肌が立つ。

その点が、そびえ立つ塀に垂直に立って歩く男の頭部であることを。
男達が運動場の中間を歩いている頃には、
校舎にいる者は皆、その存在に気が付き騒然としていた。
警備員数名が男達に近づき、立ちはだかる。
瞬間、警備員の一人が赤い液体を撒き散らして倒れる。
残った警備員は逃げ散り、男達は悠々と校舎に向かって歩き始める。
「キャア—————」
誰かが、いや数人が金切り声をあげた。

「残っている生徒は下の食堂に集まりなさい！早く！」

このクラスの担任が廊下で叫んで、生徒を誘導している。
ここで生徒の模範たるルコリーが率先して生徒を誘導すればカッコいいのだが、
ルコリーは震えながらサユの席から立つのがやっとだった。
彼女にとって、人殺しを生業としている人間を目の当たりにしたのは初めてだ。
所詮、彼女の知る世界とは、実家とその周辺とこの学校だけのお嬢様なのである。

『何かあれば中庭に来てください。』

おぼつかない足取りで教室を出たとき、サユの言葉を思い出す。
ルコリーは迷った。
皆と一緒にいるべきか、嘘つき女の言葉に従うか。
いや、敵が現れた今となっては嘘つきとは呼べないか。
あの男達が私を狙っているとは限らない。ただのゴロツキが気まぐれに襲撃しにきたのかも。
いやいや、タイミングが良すぎる。
狙いは私だ、とルコリーは確信する。
だとすると...
中庭側のくもりガラスの窓は全部閉まっていて、中庭の様子はわからない。
でもサユがいるはずだ。
彼女は戦えると言っていた。
よくわからないが、何か中庭で準備をしていた。
中庭に向かう決心をする。
恐怖と焦りで、いやな汗が出て頭の中はグッチャグチャだが
ルコリーにはハッキリ解る事が一つだけあった。
私が皆と一緒にいると被害が増えるだけだと。

階段を下りて中庭に繋がる扉への廊下が長く感じる。
走っているのに。
恐怖で足がもつれて転びそうになる。
ようやく扉に行き着き、扉を開けて外に出ると声をかけられた。

「よう嬢ちゃん！」

野太い男の声が、上から降りかかる。

浅黒い中年の男の顔が、2階壁の角からにゅっと出てきた。

「人を探しているんだが、知らねえかなあ。」

「は.....う.....」

ルコリーは見上げ、応えようとするが声にならない。

男の全身が校舎側面からこちら側に出てくる。

その体は壁に対して垂直に立つ。

もじゃもじゃと伸びるもみあげ、ゴリラのような粗野な顔立ち

胴回りには黒い鎧、手には大きな手甲、盛り上がる筋肉、

大きな厳めしい防具のついた靴、

どうやらこの大きな靴で壁を歩くのが彼らの魔法のようだ。

陽に焼けた肌と黒い装備品、毛深い体毛等で全体黒い印象の男。

そして、ルコリーは男に対しての耐性があまりない。

父と兄意外で話した男性といえ、学校の老教師ぐらいである。

気が付くと屋根にもう一人いた。

最初の男が中肉中背なら、屋根の男はそれよりスマートだ。

2人は同じような装備をしている。

最初の男が言葉を続ける。

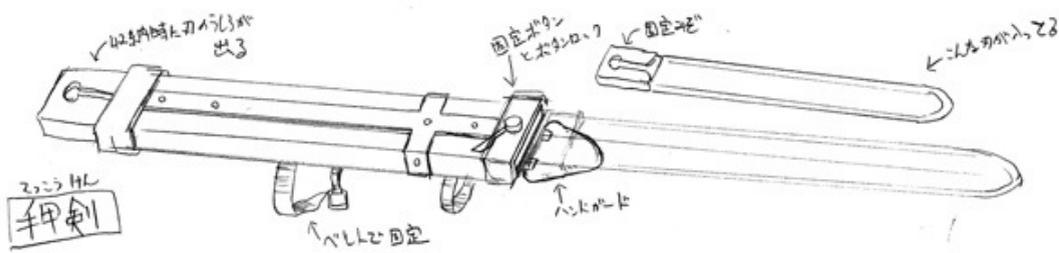
「ルコリー＝バーキンて娘なんだけどよおー」

この言葉でルコリーの恐怖はピークに達した。

中庭に走り出す。

「おい、こら待つべえ！！」

男は怒鳴った。その怒声がさらにルコリーの恐怖を深くする。



「んだよ、教室にやあ人がいねえべし」
 中肉中背の男がぼやく。
 「兄者、女達は一階の奥に集まってるようだべ」
 スマートな方が応える。
 「んあ？ザガよ、ジガはどうしたっぺ」
 「ジガは女達の方に行ったっぺよ。ヤツあ若え女が好きだべな」
 「ルコリーてヤツあそっちかも知れんけ、そっちはジガに任すか」
 「んだな、さっきの女あ、聞いてた人相と似とったしのお兄者」
 「あ、ツノみたいなピンクの髪とか言うとったのお。はははは。」

何せ北では有名な家のお嬢様らしいけえ、トチ狂って
他のヤツとは別行動しとるかもしれんけえ！」
中肉中背の、兄者と呼ばれた男が室内運動場へ続く廊下の屋根へジャンプする。
スマートな、ザガと呼ばれた男がそれに続く。

その頃、ルコリーは絶望していた。
中庭にサユが居ないのである。
男たちが屋根に降りる大きな音がして、驚いて振り向く。
2人の男が、渡り廊下の屋根へ降り立った音だった。
振り向きざま腰が抜けて、中庭の真ん中辺り、低い樹木の植えられた花壇の前に尻餅をつく。
朝はサユと2人で会話したその場所だった。

「よおお、嬢ちゃん。ルコリーいう女あお主知つとるじゃろう」
中肉中背の男が聞く。
青い顔をして、首を横に振る。
恐怖で涙すら出ない。口が震えで噛み合わず開けっ放しでカラカラに渴いてきた。
「それともお主がルコリー・バーキンかのう！」
今度はスマートな方が聞く。
先程よりも高速で首を振る。
「知つとる事喋っちまったら痛い目にあわんべ。」
「何とか言うべやあ女あ」

男達が歩き出そうとしたとき、カラカラと音が響く。
ルコリーの後方、樹木の向こうから誰か来たようだ。
杖の音だ。
男達は不意の、奇妙な姿の来訪者に驚き、動きを止めていた。
そして杖の持ち主は、腹立たしい事にゆっくり歩いて来る。

「さっ...サユ！！」
やっと声が出せた。サユが花壇に近づくにつれ、ゆっくりとその姿が見えてくる。
サユはどんどん近づいてきて。
どんどん近づいて、杖がサユの手をはじいた。
「痛っ！」
サユは慎重に杖を動かして探り、尻餅をつくルコリーの太ももに杖が当たった。
『あ、ごめん。そんなところにいたのですね。』
「ごめんじゃないわよおお！なんでながにわにいないのほおおお」
ルコリーは、サユの姿を見て安心したのか涙が溢れて止まらなくなった。
ついでに鼻水で鼻が詰まり、ちゃんと言葉を発音できなくなっていた。
『トイレぐらい行かせてください。』
腕から杖と太ももを通して、魔法で話かけるサユ。
今の状況が解っているのかいないのか、無表情で普段通りの話し方だ。
いつもは頭に直接話しかけられてるみたいで、首筋がムズムズするのだが
今はそれどころではない。
「どいれどころじゃないでじょうう、だいふえんだっだんだかだあああ」

『あーはいはい ごめんごめん。でもよくこの中庭に来てくれたわ』
サユはルコリーの頭を撫でた。
嘘つき女だとか、彼女が戦えるかどうかなんてもうどうでも良かった。
今この場で頼れるのは、白杖について頼りになるかどうかわからない
サユしかいなかった。

サユはどこからともなくスケッチブックを出す。
“この人がルコリー＝バーキンです。”と書かれたページを開く。
後ろにいるルコリーが、このページを見てないのは幸いだ。
きっとさらに大きな声で泣くだろう。
“あなた達の目的はなんですか？”続いてページを開く。
「ああ？んだばそいつを殺すのを頼まれただべ。」
「そのピンクの髪のを殺したら、ワシらも去るけえ、杖の嬢ちゃんはどっかいねや。」
「ザガ、去る前にワシらも女の物色をしたいのお。」
「それもそうじゃのう兄者。」

男達の会話が弾む中、スケッチブックをしまったサユが次の行動に出た。
杖を持って踊り出した。
「ふわわあああああああああっ!？」
ルコリーの大声に、サユが顔をしかめる。
殺人者を前に、多感な年頃の少女が発狂して踊り出したとしても仕方がない。
そしてそのシュールで、滑稽な光景を見れば絶叫を上げて仕方がない。
それも殺されるかもしれない立場としては。
しかし、サユにとってはうるさい雑音でしかなかった。

踊る、といってもサユのそれはゆっくりとした、それでいて無駄のない動きの剣舞である。
もしこういう状況でなければ、ルコリーでもその踊りの精練さに気づいたであろう。

「...兄者、なんば踊り出したヤツがいるべ」
「なんじゃあの目隠し女。頭がパーになっただか？」
「なんか面倒じゃ！全部切っちまおうべ兄者！」
「んだ！」

おしゃべり好きな男達だが、決断すると早い。
装着された大きな手甲から、幅広の剣が飛び出る。手甲剣だ。
他に剣は帯びず魔法の特性から考えると、男達は暗殺を生業にしている可能性が高い。
それが白昼堂々と真正面から出てきたのだから
今回の仕事は簡単に済ませると考えていたことが伺える。

兄者と呼ばれた男は、すばやく木造の室内運動場の壁に移り、
魔法を使って、壁に垂直に立って走る。
サユの左側に回りこんで近づいてくる。
「邪魔じゃああああ小娘えっ！」

男はまずサユを狙って飛んだ。

右手甲剣を伸ばし急接近。

次の瞬間、男の右手は付け根から無くなり、

同時に鎧と金属がこすりあう音、

その次には、男は首と口から血を吹き出して砂を巻き上げ地面に転がり落ちた。

男が近づいた瞬間、セーラーの襟と深緑のスカートをひるがえし、

クルクルと華麗に2回右回りに回ったサユの右手には

いつのまにか剣が握られていた。

左手には白杖の一部。

白杖は、しこみ杖だった。

ルコリーは現状を全て把握出来てなかったが、

地面に転がった男の虚ろになった目が、彼女に向いてるのに気がついた時、

気を失った。

「え？うそじゃ...うそじゃあアニキ.....

うあああああ、あアニキィ！ジガ、ジガあどこにおるんじゃああああ。アニキがああ！」

ザガと呼ばれた男が、渡り廊下の上で怒りを顕わにして足踏みをした。

大きな靴が、学校中に響き渡るほどの大きな音をたてる。

一方、ジガと呼ばれる男はその頃。

1階食堂に足を踏み入れていた。

「んぐふふふ、ええのおええのお」

集まった少女達の品定めをしている。

戸口からゆっくり歩いて近づこうとする大きくて黒い男と、

帰る機会を逃して、教室の隅に固まって少女達と数名の教師。

ルコリーとサユの担任もいた。

彼女は大丈夫、大丈夫だと生徒に、いや自分に言い聞かせていた。

筆記具しか動かせない魔法石の魔法は、ここでは何の役にも立たなかった。

ジガは興奮していた。

なにせ若い若い女子が好みの彼には、この学院は天国だった。

警備員が城国軍に助けを求めて、隊を連れてくるにはまだ時間がある。

兄達がターゲットを葬り、女子を選んで連れ去るには十分な時間がある、と考えていた。

大きな音が響いた。壁に何かを叩きつけるような音。

「ん、兄者か！？」

ジガにはわかる、兄弟で長年愛用している大きな靴の音だ。

兄弟達は3人とも靴に魔法を込めると、壁でも天井でも自在に歩ける。

靴が大きいほど効果が高い。

その靴を踏み鳴らしてるのは、長兄か次兄か？

今回の標的を見つけた合図...にしては何かひっ迫した音に聞こえる。

ジガは急いで廊下に出た。

音のした方へ廊下を急ぐ。

校舎の中ほどを過ぎると、曇りガラスに動く影が映る。

ジガは慌しく走るのを止め、窓を開けた。

ちょうどザガが憤怒で顔を赤くして、渡り廊下の屋根から一直線に降り、

振り下ろした手甲剣をくるりと避けたサユに、頭の上半分を吹き飛ばされたところだった。

頭部を失った男は、膝から崩れ落ちた。

「うわあああああ、ガガ兄ィィィィィ！ザガ兄ィィィィィ！」

ジガは兄達より大きな手甲剣振り、窓を破壊した。

蓄えられた魔法より大きな力を受けた曇りガラスは割れたが、

それ以外の、木の窓枠を失ったガラスは四角いまま中庭に落ちた。

ガラスと木枠の破片が散らばる中、ジガは窓に足をかけ飛んだ。

目隠しをした少女へと。

「ぬぐおおおおおおおおおおお！」

先の男2人より大きな体が宙を舞って近づく。

男の叫び声には涙声もまじっていた。

サユは大きくかつ慎重に後ろへ飛びのく。

サユは知っている。

この後ろには花壇や障害物がない。

こんな時のために庭を足で計り、つまづきそうな石を取り除いた。

間一髪、手甲剣の一撃目はサユの制服の腕の一部を切り裂いた程度で終わった。

「ぐおおおおおおお、よぐもよぐもおおおおおおっおおおっっ！」

大泣きしながら振りぬいた剣を、再度振りかぶるジガ。

先の男2人は、サユが弱い者と舐めてかかった。そこにスキがあった。

3人目は違う。激しい殺気を放ち全力で向かってきた。

しかし憤怒に狂っていた。

サユは無表情のまま踊るように体を回して、

男の剣を交わすと相手の喉に剣を突き立てた。

数秒間気絶をしていたルコリーが、気を取り戻してすぐに見た光景は

大きな男が喉を貫かれ、血を吹き出しながら蠢く光景であった。

ルコリーは失禁をした。

全てを終えたサユはその場にしゃがみ、ケホケホと咳き込んでいる。

体中の力が抜けたルコリーは、この状況の理解が追いつかなくて

再び意識が朦朧とし、気絶しかけていた。

近くで金属音がして、硬いものが足に当たる。

「ひっ」

猫背と異様に長い手、男の放つ独特な雰囲気それがそれを拒む。

男はイエンセン城国の方を向いて呟く。

「思ったんだがなあ、そろそろかと。」